第103号
2017年8月

■ 目次

◆ 永遠の希望を胸に、一服の清涼感を貴方に
◆ 林達劉事務所設立14周年
◆ 最良の選択
◆ 林達劉事務所の一員として中国知財界の発展をこの目で
◆ 設立記念日に思いを寄せて
◆ 輪廻

永遠の希望を胸に、一服の清涼感を貴方に

北京林達劉知識産権代理事務所
所長　劉　新宇

瞬く間に1年が過ぎ去り、今年も夏がやって来ました。8月18日、林達劉事務所は設立14周年の記念日を迎えることができました。2003年設立当初にはまだおぼつかない足取りで歩んでいた私どもですが、今ではしっかりと一歩一歩歩むことできるようになりました。これまでの歩みは、多くの先生方や友人の皆さんのご支援、ご指導の賜物であると心より感謝しています。暦の上では秋とはいえ、まだ照りつけるような日差しの日々が続いていますが、今回のIPNEWSで設立14周年関連の文章を通じて、皆さまに感謝の気持ちをお伝えしたいと思っております。そして、これらの文章が、皆さまにとって、真夏の一服の清涼剤になれば幸いに存じます。

これまで、事務所設立記念の特集でも、年報の作品集でも、私は、「はじめに」というエッセーでその1年間の自分の思いをまとめ、皆さんにご紹介したり、自分の思いの丈を訴えたりしてきました。しかし、今年から、設立記念日でも、年報でも、私たちは、皆さんとより密接な交流ができるように事務所の所員の生の声をお伝えすることにしました。それに伴い、私のエッセーは徐々にその役目を終えると共に、今後は若い所員の育成、及び知財界においてサクセスストーリーを歩んできた先輩や成功を目指して試行錯誤しながら進んでいる若い世代をインタビューすることに自分自身の仕事の重点をシフトさせ、引き続き微力ながらお役に立てるように努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

私は今年51歳の誕生日に、私の尊敬すべき、師であり友でもある友人に書道作品のプレゼントをお願いしました。この友人の文化素養は非常に奥深く、私が依頼した「潔」と「趣」という二文字で、ご自身のスタイルを表現してくれただけでなく、自分に対する解釈と私に対する期待を表してくれました。

その友人は、「潔」と「趣」という字を説明する時、『紅楼夢』におけるヒロイン黛玉が花を葬った時の句「質本潔来還潔去」を引用されると同時に、彼自身の人生哲学である「人生応有趣」を示してくれました。

私の理解者である皆さんは、私の考えはとりとめもなく、一つの趣味に一途であることをご存じだと思います。私は、読書が大好きですが、多くの事柄、特に新たな事に対しては、さほど関心がありません。ですから、私のことを心から理解してくれている友人が、私の中年女性としての悩みや思いを深く理解し、私が誕生日のプレゼントをお願いした本当の目的をお分かりであったと、私は思うのです。

プレゼントをいただいてから、すでに半年余りが経ちました。友人の作品の字とそのお話は、ずっと私の胸に刻みつけられ、私をいつも反省させ、その反省の上に自分自身が内から湧き出る新たな喜びを感じられることを願っています。

仕事や、人生のさまざまな段階において、特に私たちのように法律に関する仕事に携わっている者は、事柄の本質と触れ、それを認識できると思います。特に、自己に対して、一般人の真実の本質として、はっきりと認識し、或いは改めて認識することがとても重要なのです。

最近、私はこの改めて認識するという過程を少しずつ経験しています。正直言えば、人生において自分の魂に触れるところまでいくと、自分ではっきり認識しなければいけないと分かるようになり、その重要性と緊迫感というものは、その他の如何なる事柄を理解する段階を遥かに超えています。この「自己覚醒」の過程は、そう容易いことではなく、非常な苦しみも伴いますが、私たちが日々のルーティンのように、それをやり遂げたら、次の段階に歩みを進めることができるのです。

今後、私は『Linda午後[1]』の「読書ノート」において、自分自身のそのあたりの体験を紹介したいと思います。ですから、私は先日、『生活における読書ノート（2）』の中で、「しばらくの間、ペンを置かせてくださいね。」と申し上げたのです。私は、私自身の「改めて模索し、改めて認識する」という過程が引き続き継続し、私は依然として「自分で学び、自己覚醒する」という過程にあることを分かっているのです。しかし、今、辛いという気持ちは基本的になくなり、多くの時、自分自身の心の中に大きな喜びや変化が起こっていることに驚き、自分自身の生命力の旺盛さに感動しています。

[1]「リンダの午後」は弊所が中国微チャット（WeCHAT）で運営する公式アカウントであり、主にエッセー、詩などを発表している。

51歳の私は、いつもあれこれ考え、絶えず自己否定をし、変化を求め続ける落ち着きのない心の持ち主だと、皆さんから思われているのではないでしょうか。そうなのです。それこそが私なのです。私はこれまでの50年間「変化を求め続けた」過程において、仕事を完成させ、目標や理想を実現させたことが実際にどれだけあったでしょうか。また、周囲の自分に対する評価にどれだけ悩み、自分の心の叫びに心から注目し、真剣に探求したことがどれだけあったでしょうか。今回、自己を改めて認識するというとても贅沢とも言える過程において、私は、自分自身が再び、自分自身と向かい合い、この社会において楽しく過ごしていることを発見し喜びを感じているのです。

ですから、林達劉事務所設立14周年の機会をお借りして、私は友人の皆さんにご報告させていただきますね。Lindaは現在と将来的にも暫しの時間を通じて、自分自身の再認識と再覚醒を完成させた後、皆さんの前により真実で、より美しいLindaとして再び登場したいと思っています。再認識と再覚醒の過程は、私のちっぽけな人生にとって、必要不可欠な修行であり、私たち多くの友人の皆さんも人生において経験した、もしくは今後経験するであろう素晴らしい体験であると思うのです。

今年の夏、世界的にも有名な指揮者であったカラヤンが指揮したベートーベンの『運命』が常に私に寄り添ってくれ、共にとても素晴らしい夕暮れの時を過ごせました。『運命』はベートーベンの作品の中でも、私が一番好きな交響曲で、特に第二楽章はとても感動的です。私の生命の中で、多くの友人が、私の人生のさまざまな段階で、私が悩んだり、迷ったりした時、いつも手を差し出してくれたことで、私は未来を、楽しみを信じ、幸せを求めようとできたのです。

人の人生は苦難に満ち、仕事や生活は、何事も恐れることなく、チャレンジすることが必要です。人の人生は、こんなにも信じられる友人に恵まれ、こんなにも多くの信頼に溢れているからこそ、より美しくなるのです。そして、最終的に、私たちは自分自身を理解でき、救い出すことができるのです。私たちの人生において、何も望まず、魂を救ってくれた友人に心より感謝します。そして、私をこのように幸せな気持ちにしてくれた運命に感謝の気持ちで一杯です。

毎日このように炎天下の日々が続きますが、心に一服の清涼を感じ、心に喜びを感じていただけることを心より願っています。皆さんが今回の弊所の特集を気に入っていただければ幸いです。

今回文章を担当した李茂家（所長代行）、張芬芳（パートナー）、耿秋（パートナー）、張宝瑜（事務所シニアグループリーダー）、宋暁雯（事務所シニアグループリーダー）の文章をお楽しみください。

皆さんのますますのご活躍、幸せな日々をお祈りいたします。

林達劉事務所設立14周年

北京林達劉知識産権代理事務所
所長代行　李　茂家

林達劉事務所は、いつの間にか14年の歳月を歩んできました。事務所設立14周年を迎えるに当たり、私はこれまで事務所の発展を支えてきてくれた4名の所員に、彼らが林達劉と共に歩んできた旅路を紹介してもらいたいと思っています。

事務所と共に歩んできた旅路を振り返ってくれる4名の仲間を紹介します。まず、大学卒業と同時に社会人としての一歩を林達劉と共に踏み出した張芬芳、及び事務所が軌道に乗り始めた2005年に入所した耿秋ですが、彼女たちは現在、入所当初の幼さや未熟さを脱却し、事務所のパートナーとして、重責を担いながらも頑張ってくれています。それから、元企業の知的財産部員であった宋暁雯は、お客様の立場を熟知し、ネイティブのような英語を巧みに操れるというメリットを持ちながら、今では特許代理事務所の弁理士として、素晴らしい仕事人に成長しました。さらに、国家知識産権局の元審査官であった張宝瑜には、公務員時代の面影はすでになくなり、お客様にプロフェッショナルなサービスを提供できるようになりました。

彼らのこれまで歩んできた旅路から、私たちは、小さくて脆弱で、名もなき林達劉事務所が、徐々に大きく、強く、そして世界的にも少しずつ認められるように成長してきた足跡を見ることができます。当時を思い返せば、まずLindaが2003年に日本留学より帰国し、怖いもの知らずにも単独事務所を設立し、2005年には業界でも名実兼ね備えた魏啓学先生が加入してくれたことで、林達劉事務所にとっては、成功の種を蒔いてくれたのです。そして、中国開放改革の進展に伴い、知的財産権がますます尊重、保護されるという追い風も味方してくれ、Lindaと魏先生が、まだ知的財産権に対して全く無知であった卒業したばかりの若者を慈しむように育成し、14年後の今日、このように大きな実を結ぶことができたのです。

また、彼らのこれまで歩んできた旅路から、私たちは林達劉事務所が設立当初から、職人精神とイノベーション精神を根付かせようと努力していたことが分かります。私たちは、小さなことから始め、些細なことも疎かにすることなく、分からないことは、謙虚に同業者やお客様に率直に教えを請いました。私たちは設立当初の、以前からのやり方、手作業、電子システムもない、ひな形のない、最低限のオフィス環境という事務所から、14年後の今日には、林達劉の遺伝子による厳格な作業のやり方、整備された電子管理システム、さまざまな規則制度と明るく現代的なオフィス環境を有する事務所になれたのです。この他、北京本部だけでなく、上海オフィス、蘇州オフィス、大連事務所などを設立し、林達劉の将来的なさらなる発展のために良好なハードウェアの基礎を構築しました。

そして、彼らのこれまで歩んできた旅路から、私たちは、林達劉事務所の信義誠実をモットーとし、品質を何よりも優先させる着実で、むやみに高望みをせず、功名心に急かされない所訓をしみじみ感じることができます。Lindaと魏先生は事あるたびに、若い所員を根気強く育成し、14年間の弛まぬ努力を通じて、林達劉事務所は、誠実に、細心の注意を怠ることなく事に対処し、ミスや誤りは隠し立てすることなく自ら認め、責任感を持って、自己を冷静に分析し評価できる風通しのよい事務所となることができました。設立当初、Linda1人で始めた事務所が、現在では法律的な基礎に優れ、科学技術に関する知識を究め、外国語に堪能な弁護士、特許弁理士や商標弁理士などを含む300名のさまざまな分野に優れた所員を擁するようになり、林達劉の将来的なさらなる発展のために強力な人材をプールしているのです。

さらに、彼らのこれまで歩んできた旅路から、私たちは、林達劉事務所の強い向上心や前向きに生きるためのエネルギーを感じることができます。Lindaと魏先生は文化建設に力を注ぎました。そのため、Lindaは所員に仕事の余暇に、多くの良書を読むように、自分自身の心得をシェアし、多くのサクセスストーリーを歩んだ人が読書から人生の真の意義を見出したことを教えることに心血を注いだのです。また、時間のある限り、パートナーから一般の所員に至るまで、胸襟を開いて語り合い、心の悩みをいろいろ聞き出し、所員が気持ちよく仕事できる環境を作り出すことに尽力したのです。その他、事務所は、できる範囲で、例えば、スポーツクラブの利用カード、部門ごとの所員旅行、懇親会など所員の福利厚生を充実させ、温かな愛情に満ちた大きなファミリーとなったのです。

その他、彼らのこれまで歩んできた旅路から、私たちは、林達劉の若い所員が夢を抱き続け、その実現のために頑張っている姿を見出すことができます。彼らは、如何なる苦労も厭わず、学習を続けようという意欲に富み、仕事の余暇時間を利用し、さまざまな研究会に参加したり、外国留学でさらなる研鑽をしたりして自己を充実させるために頑張っているのです。また、林達劉の若い所員は、すでに事務所にとって必要不可欠なパワーとなっているここで紹介した4名の所員のように強い責任感を持ち、多くの複雑な案件に対して、責任を持って処理したり、管理業務に従事したりしているのです。彼らは、自ら恐れることなく、世界に一歩を踏み出し、様々な国際会議でその力を発揮したり、事務所を宣伝したり、事務所の更なる発展のために弛まぬ努力をしてくれています。

林達劉事務所設立14周年に当たり、私たちがこれまでに国内外のお客様の皆さまより賜りましたご支援とご信頼に、改めて心より感謝申し上げます。皆様方のご支援のお陰で、私どもの今日があると、感謝の気持ちでいっぱいです。

私どもは、初心を忘れることなく、今後も精進し、より一層輝けるように努力する所存ですので、今後ともよろしくお願いいたします。

最良の選択

北京林達劉知識産権代理事務所
パートナー　張 芬芳

今年8月18日、林達劉事務所は設立14周年の記念日を迎えます。まず、この良き日を無事迎えられることに心より感謝申し上げます。事務所が14歳の誕生日を迎えるということは、私が事務所に入って14年が経ったことを意味します。日本では、同じ会社で長い期間継続して勤務することは、当たり前のことのようですが、中国では人材の流動が比較的頻繁ですので、14年間というのは非常に長い期間なのです。ですから、友人から、「どうして、林達劉でこんなに長期間働いているの。」と尋ねられることがよくあります。

私は一見冷静で理知的に思われがちですが、実は人生の大事は、基本的に感性によって決めてきました。そんな私も、この問題には上手く答えることができませんでした。ですから、いつも笑いながら、「私はLindaのファンで、魏先生のファンだから、林達劉にいるのよ。」と答えているのですが、どうして彼ら2人のファンであるのかについて、簡単にまとめることはできません。しかし、林達劉事務所で仕事をすることは、私にとって最良の選択で、ここで、私は仕事と収入を得るだけでなく、自分の人生観や価値観を完全なものにすることができたと自信をもって言えるのです。

思い返せば、私は当初、大学生の実習生として、林達劉に来ました。その当時のLindaは、今のようにスマートではなく、結構ポッチャリ（笑）していました。その当時、林達劉にはこれといった案件がなく、2003年には、PCT出願が2件、2004年には24件あっただけでしたが、事務所の所員は皆大忙しで、毎日残業をして、土曜日も休日出勤していました。それは、「若者には何も必要ない。週末もなくてもよい（笑）。」という日本から帰国したばかりのLindaの名言によるものでした。私はその当時、皆は一体何を忙しくしているのかと不思議に思っていました。印象深かったのは、その当時のLindaの過酷とも言える要求でした。Lindaは、日本のお客様に出す書簡やメールにおいて、フォントは、MS明朝、MSゴシックのどちらを用いるべきなのか、英数字は、丸い印象のCentury、それとも上品な印象のArialを用いるべきなのか、字体の間隔は20ポイント、22ポイントのどちらを採用すべきかなどについて、検討に検討を重ねたのです。彼女は、日本知的財産研究所、発明協会（現在の発明推進協会）や経済産業調査会の専門誌に文章を発表した経験やその厳しい観察眼で、私たちが作成した書簡やメールを1通、1通をチェックしたのです。また、弊所では、設立後暫くの間、管理システムが構築されていませんでしたので、システム内部の書式に規定がなかったのは言うまでもありませんでした。ですから、私たちは毎日、書式の調整や用いるフォントについて、あれこれ頭を悩ませていたのです。その当時、Lindaは、お客様に郵送する書類の重ねる順序や、ゼムクリップでとめた

部分を封筒のどの方向に入れるべきかなどといった細かい点まで自ら教えてくれました。さらに、彼女は、「また」と「又」の使い方、法律の「条」と「項」の使い分けの学習のために、日本の友人を講師として招き、講座を開催してくれました。さらに、私たちは、中日の知的財産権用語の比較を研究し、私自身も大学の卒業論文に用語比較を行い、日本の特許ニュースで発表させていただきました。当時、あるお客様が私の論文をご覧になってから、弊所にお越しになり、いろいろお話くださり、私は、用語の正確性の知的財産分野における重要性を初めて認識したのです。

そして、日本の友人のご指導の下、私たちは事務所の書簡やメールの書式や用語などの所内規則を次々と決定していったのです。その当時から苦楽を共にしてきた所員の多くは今では、事務所のパートナーや各部門の責任者になっています。その当時本当に過酷だったLindaの要求が、その当時から私たちの体内をくまなくめぐる血液として、私たちが緻密さと完璧さを追求する出発点となり、林達劉事務所の遺伝子となったのです。

今年の春、弊所北京本部の商標部部長であった耿秋は北京を離れ、上海オフィスに異動しましたが、上海オフィスのメンバーより電話で書簡やメールの書式やフォントについて尋ねられた時、私は企画部のメンバーに以前フォントなどを深く検討した時のことを話し、当時のことを懐かしく思い出しました。

今後、事務所の多くの所員は、弊所現在の書簡やメールの書式について、一体何に基づくものなのか深く悩むことはないかと思います。まさにLindaがずっと強調しているように、私たちの世代は、自分たちの経験を事務所の若い所員に話したり、事務所の文化を宣伝したりすることは重要だと実感しました。。

中国で最も優秀な師範大学である北京師範大学を卒業したLindaは、人を教え育てる責任感と使命感を持っています。ですから、事務所を設立してからこれまで、自分が思いつき、考え得る全ての事を、全力で周囲の人に伝えてきたのです。

私たちは皆、Lindaとおしゃべりをするのが好きです。正確に言うならば、Lindaのおしゃべりを聞くのが大好きなのです。仕事がどんなに忙しくて、心が晴れない時も、Lindaは私たちを招集し会議を開催していますが、会議において、Lindaは出張の出来事を共有したり、最近読んだ本の感想を紹介したりします。私たちは、手元に早急に提出しなければならない案件があったり、お客様に返信する必要がある相談メールなどがあったりすると、とても気が急いたことがよくあります。しかし、事務所で暫くの間、Lindaの顔を見ない日が続くと、所員は、落ち着かない気持ちになり、「Lindaはいつ戻ってくる予定ですか。ここ暫くLindaの話を聞いていないです。」と尋ねるのです。私たちは、いつもLindaの話を聞き終わると、とても気持ちが上向きになり、やる気満々になれるのです。ですから、残業続きだったり、何か方向性が見出せなかったりする時、Lindaとの会話によって、プラス思考になれるのです。

私個人にとっても、私自身元来どちらかと言えば閉じこもりタイプの人間なので、Lindaのように自らの心の扉を叩

いてくれる人にだけ、プラスの考え方やマイナス面の悩みなど心の全てを洗いざらい見せることができますが、同僚や部下に対して、不満などの心のうちを打ち明けることは、なかなかできません。このことについて、私は長年にわたり悩んできましたが、そんな時も、Lindaは、「もっと強くなりなさい。問題から逃げることなく、思ったり、感じたりすることを明らかにしなければ、問題は解決できませんよ。」といつも寄り添い励ましたり、たしなめたりしてくれます。私自身年齢を重ね、特に子供が小学校生になってから、「家庭だけでなく、仕事や教育における多くの問題は、他人事とするのではなく、自分の問題として考えることが必要です。成長とは、他人を教育したり、子供を教育したりすることではなく、自分自身を教育することなのです。教育、管理、家庭、会社、国、組織……は、弛まず努力することが必要です。」とLindaが言っていたことを心から理解できるようになりました。

Lindaは、読書、ダイエット、飲食管理などにおける先駆者で、彼女は自らを律することでその頂点に到達することができたのです。また、ある事柄は、反対側から見ると、必ずしも正確であるとは言えませんが、そのような時でも、彼女の情熱や誠実さは、所員やお客様から認めてもらえるのです。

北京の街の至る所で現在、読書の重要性を宣伝する広告を目にします。私の娘は今年小学1年生で、クラス担任の先生も、読書の重要性についていつも強調しています。私は、この観点に反対意見を唱える人はいないと思いますが、自ら実際に努力して行う人は、さほど多くないように思います。林達劉事務所では、読書の良さに注目し、読書を奨励しています。2003年の事務所設立当初から、弊所では外国語の文法や作文の専門書、管理学分野の専門書、さらに文化や哲学などの書籍を、予算をとり購入しています。Lindaは自ら書籍を読み終わると、間を置かず、所員のその感想を紹介してくれます。

正直言えば、私は暫くの間、このことをやり遂げることは、さほど難しいことではないと思っていました。その後、私の高校時代の友人が、毎日WeChatで読書感想を紹介しているのを見て、深い印象を持ちました。そこで、弊所のWeChatプラットフォームでも、毎週金曜日に読書コラムを開設し、所員に読書感想文を発表させることを提案し、日常の業務以外となる文化交流のプラットフォームを設立したのです。その頃になり、多くの事柄は実際に行動することは、そう容易なことではないとようやく分かりました。言語を文学に転換するには、いろいろなことを考える必要があり、特に文字の背景にある人の思想を推し量ることが必要不可欠で、人には考えがあるからこそ、思想があり、様々な衝動を表現できるのだと理解できたのです。弊所には「LindaからのIPニュース」という様々な情報や考えを皆さんにお伝えする絶好のプラットフォームがありますが、その影響力は1人の力によってなし得たものではなく、管理と考えの集合によってできるものなのです。また、私たちはプラットフォームの力を、自分個人の能力のよってできるものであると、決して思ってはならず、プラットフォームは私たちをより高いところに立たせてくれますが、このプラットフォームを離れたら、私たちはこんなに高く立つことはできないのです。ですから、私たちが成長することで、このプラットフォームがより高くなれる力を持てるようにしなくてはなら

ないのです。

私どもの「LindaからのIPニュース」は2005年に第1号を創刊し、今年6月に第100号を発行することができました。それと同様に、私たちの読書活動も引き続き行っていかなければいけないと思っています。この読書活動について、弊所の300名余りの全ての所員に周知が行き届いていると言えませんが、皆の推薦書籍を読むことによって、多くの良書との出会いもあるし、皆が問題や人生をどのように考えているのかということを知ることもできるのです。

私はこれまで長い間、仕事をきっちり仕上げるのは自分の仕事ですが、事務所の文化建設はLindaの責任であると考えてきました。Lindaは庭園になりたいと言っていましたので、私たちはそれぞれが1本の花として、それぞれが咲き方を見せる必要があるのではないでしょうか。私たちは皆、管理業務を行い、部門を管理し、お客様を管理し、案件を管理し、私たち1人1人が小さな庭園にならなければいけないのです。知的財産権分野は、優秀な人材が集まっている業界で、私たちの時代はますます変化が進み、若い世代の発言権はますます強くなっています。管理というよりは、あなたの人となりで、周りの人がその人となりを、つまりあなたの能力、あなたの情熱を見て、あなたが周りの人のことを考えているかどうか判断し、今後共に進めるかどうかを見定めているのです。

私は、これこそが林達劉事務所が私に教えてくれた重要なことで、仕事や生活のために、弛まず努力し、全ての情熱を示すことで、自分自身がより美しく、周りの人もより美しく、事務所の庭園もより美しくなれることを切に願ってやみません。

林達劉事務所の一員として中国知財界の発展をこの目で

北京林達劉知識産権代理事務所

事務所シニアグループリーダー　張 宝瑜

はじめに：成長は生命力、自信の表れ

● 何も知らずに知財界に飛び込む

私は昨年、ある米国の弁護士から、「なぜ知財の道に進んだのか。」と尋ねられ、迷うことなく、「仕事が欲しかったから。」と答えました。とても褒められた答えとは言えませんが、それこそが私の事実の思いだったのです。

2001年に大学を卒業した私は、国家知識産権局に審査官として入り、社会人としての一歩を踏み出しました。当時、中国において知的財産権は新興産業として、その将来性が期待されていましたので、新社会人である私は、その発展をわくわく楽しみにしていましたが、実は特許とは、知的財産権とは一体何なのか、正直に言って全く分かっていなかったのです。

国家知識産権局に入局後、英語がまあまあ堪能だった私は、国際的な協力部門への業務支援にしばしば派遣されました。そこで、私は、中国政府が、中国の知的財産権制度の整備を懸命に推し進め、中国国内の知的財産権保護意識を向上させるために、世界知的所有権機関や各国の特許庁と協力しながら、山積する仕事に取組む様子を目の当たりにしたのです。

歳月は瞬く間に過ぎ去り、私は国家知識産権局で11年間（そのうち、特許審判委員会での勤務期間3年も含む）勤務した後、民間企業に行きたいと思うようになりました。それは、プールで長年にわたり磨いてきた水泳技術を、実際に海に出て、試みてみたいという気持ちだったのです。

私は林達劉事務所に転職してから、まず、特許法律部で、お客様にOA応答したり、特許安定性に関するコメント、特許権侵害判定、特許無効審判請求の準備、第三者意見を提供したりしました。事務所における整備された業務の分業体制によって、仕事の効率を向上させることができたこともあり、お客様に事前に的を射た情報を提供することができた私は、入所2年目から、来訪いただいた欧米や日本のお客様を接待したり、知的財産に関する国際会議にも参加したりする機会に恵まれました。INTA年次会議にいたっては、2014年に香港で開催された会議に参加してから、4年連続毎年参加しています。

● **中国お客様への対応における苦労**

林達劉事務所は2003年の設立後、最初の10年間は、渉外事務所として、海外のお客様に照準を合わせて、内部のグループ育成や高品質のサービスの提供に力を注いできましたので、中国国内のお客様を積極的に開拓することはありませんでした。なぜならば、中国国内には知的財産権を重視する企業も、知財を生業とする人を尊敬してくれる企業も多くなかったからです。

しかし、ここ数年、中国の科学技術企業の目覚ましい発展に伴い、社会各界が知的財産権をますます重視するようになってきましたので、林達劉事務所も中国国内のお客様にサービスを提供することを模索するようになってきたのです。

そのため、弊所では、中国国内のお客様を専門に取扱う国内部を設立したのです。私は初代国内部部長として、国内のお客様の開拓という新たなチャレンジにゼロから挑みました。男の人生には、何かに心を突き動かされ、無我夢中になれる時期がなくてはならないと言われますが、この点から、私は非常にラッキーであったと感謝しています。国内部は、林達劉事務所の最も若い創業型部門として、部員数が十分でないにもかかわらず、案件数が増加の一途であるという状況において、各々が最大限の能力を発揮し、残業もとわず、お客様からの依頼を完成させています。

私は、国内部設立の準備期間から、中国国内お客様に自らコンタクトし始めました。私はその際、弊所ではそれまで、国内業務を殆ど取扱ったことがなかったにもかかわらず、中国においてそれなりの評価をされていましたので、自分の夢を実現させるために追い風となるプラットフォームであるとしみじみ感じました。林達劉事務所がそれまで、純粋で、細かで、プロフェッショナルな仕事をしてきたり、Lindaのその創業におけるサクセスストーリーが中国の知財業界で広く知られていたりしたこともプラスに作用し、私は、国内お客様と良好な協力関係を順調に構築することがで

きたと感謝の気持ちでいっぱいです。

しかしながら、国内企業との出会いを、実際の業務委託に結びつけることは、さほど容易なことではありませんでした。国内部が設立して最初の数ヶ月は、1件　の案件も受注することができませんでした。しかし、めげることなく、チャレンジ精神を持ち続け、ついに6ヶ月目に1件目の案件が入ってきた後は、嬉しいことに次から次へと案件の依頼が続いたのです。

中国国内のお客様とは、時差がなく、距離的な遠さも感じず、メールが頻繁に入ってきたことにより、渉外案件のために組織された弊所の管理部の仕事量が急増するという新たな問題が発生しました。そのため、弊所では、メールのやり取りの安全性と正確性を十分確保した上で、国内部と国内のお客様との連絡方法を調整したのです。それによって、お客様とのコミュニケーションのタイムリー性をより向上させることができました。

2015年に設立された私たち国内部が同年中に作成した出願書類は200件にも及びませんでしたが、その翌年に国内部が作成し、提出した国内のお客様の出願案件は、部員の頑張りもあり、850件に達しました。今年は現在の調子が続けば、年末までに新規出願案件は1000件以上になると思われます。

中国政府による13次5ヵ年計画（2016年～2020年）では、2020年までに1万人当たりの特許保有件数を12件にすることを見込んでおり、中国特許出願件数が今後も引き続き増加し続けることが予測されます。しかし、中国では特許代理サービス機構数は圧倒的に不足しており、そのサービスのクオリティーも均一化.しておらず、特に、高品質のサービスを提供できる機構が不足していることは否めません。

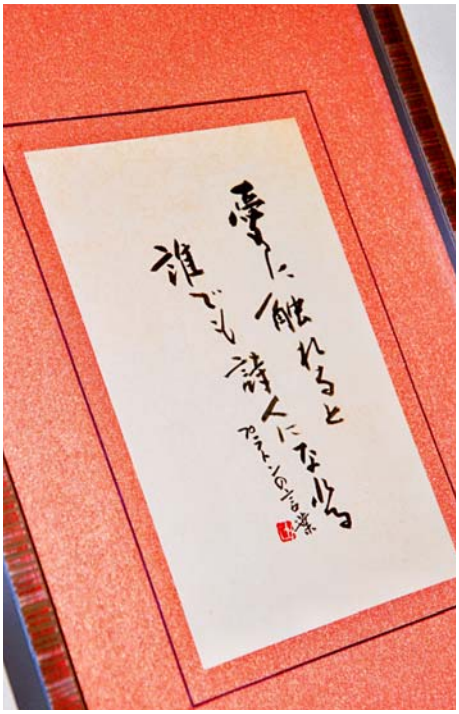
また、一部の誠実とは言えない特許代理サービス機構より煽り立てられることで、中国政府による特許出願に対する財政支援に利用して、技術含量の低い特許を大量に出願する出願人が存在していることも否めない現実なのです。

このように混沌とした状況においても、特許代理サービス機構の必要性をさほど考慮しない中国企業、特に新興企業は少なくない現状があります。現実問題として、誠心誠意作成した請求項案をお客様に送付した後、そのお客様から「作成、ありがとうございます」と、それに対する何のフィードバッグもない返信が届くと、私たち弁理士は打ちのめされたことがあります。しかも、作業の難易度の割に、手数料が大変低いのも国内出願代理の特徴の1つであると言えます。そのため、私たちの口から、ぼやきや不満が出ることもあるのです。

このように、国内部は、多くの困難に直面していますが、私は、プロフェッショナル精神を持ち続けるように部下の弁理士を励ましています。特許の生命周期は非常に長いので、出願書類の作成から提出まではほんの一部の道のりに過ぎず、高品質の特許は、登録されてからの役割がますます大きくなっているからです。低い手数料を望んでいたお客様が最終的に、私たちのところに戻って来てくれるかということがポイントになります。特許出願では、私たちの作成した出願書が登録できるかどうかということが、最も重要なことなのです。ですから、費用の安い事務所に依

頼した場合、登録できない、又は登録できても請求項作成において権利範囲に不備があるという問題があれば、結果の如何によらず時間とお金の無駄遣いとなってしまうのです。

私たちは、「お客様に何度酷く扱われても、初恋の人に対するように付き合わないといけない。」とよく笑いながら話しています。実際、この言葉には道理があると思います。お客様は、よく明細書作成などの細部にいろいろ注文を付けてくることがありますが、これは彼らが自分の知的財産権を、心から大切に思っていることの表れなのです。ですから、どんなに低い手数料であっても、弁理士としてお客様の気持ちをくみ取り、お客様の要求を満足してあげることが必要なのです。



私は、国内部の弁理士に対して、職人の精神を持ち、初心を忘れず、絶えず努力し続け、高レベルの出願書類を作成することをいつも要求しています。国内部は2015年の設立から今日まで、その弛まぬ努力によって、お客様より評価されるようになりました。例えば、ある大学の教授から、「もっと早く林達劉の皆さんに出会えていたら、以前の特許出願もそんなに遠回りする必要はなかったのに。」と言っていただけ、とても嬉しく思いました。

「你若盛開,蝴蝶自来」という中国の言葉もあるように、あなた自身が頑張れば、人が自ずと寄ってくるものなのです。弊所は、蘇州工業園区知識産権局の招聘によって、2017年4月蘇州オフィスを開設しました。高品質の知的財産権サービス機構として、蘇州オフィスが蘇州工業園区ナノ生物園に進出できたのは、林達劉事務所における国内業務が着実な一歩を踏み出すことができた証拠であると嬉しく思っています。

ここまで中国国内業務が直面しているさまざまな問題点を紹介してきましたが、このような困難と共存している国内業務には、「一横一縦（横向きと縦向き）」という現実に起因する激烈な競争が存在しているのです。

「一横（横向き）」とは、企業の命名、会社登録、財務サービスなどを提供する法律サービス機構のことを言います。これらの企業がどんどん発展し、本業のトップ企業として君臨した後、知的財産権分野にも入ってくるのです。一方、「一縦（縦向き）」とは、商標代理を核心業務として行ってきた事務所が、その規模がある程度大きくなった後、他の特許事務所を買収することによって、特許分野にまで入ってくることを言います。しかも、この「一横一縦」という勢力は通常、「インターネットプラス」というコンセプトに依存し、資本運用を利用して、盲目的に成長しているのです。

国内業務における後続者である林達劉国内部は、このような熾烈な競争のプレッシャーに直面しながら、与えられた仕事を一生懸命完成させ、その品質でお客様に認めてもらう、即ち「自己の力で、よい仕事をする」しか術はないのです。それと同時に、お客様により全面的で、マクロ的な知財策略を提供できるように、弁理士の総合的な素質を絶えず向上させることが必要なのです。

このような信念で、着実に一歩一歩歩んできた国内部は、昨年末、あるお客様より、「林達劉事務所の職人精神は尊敬に値します。」という礼状をいただきました。お客様に評価されることに勝る喜びはないとしみじみ感じました。

お陰様で、弊所はここ数年、業界内で広く認められるようになりました。これまでのサービスと評判が認められ「2016年中国四つ星ランクの特許代理機構」として表彰され、 IPRdaily 主催の「2016年グローバル知的財産権環境保護大会（2016 Global Intellectual Property EcologyCongress」（GIPC 2016）で「2016年中国10強特許代理事務所」に選出されました。また、弊所代表取締役である魏啓学弁護士は、「2016年度商標リーディングパーソン」の称号を授与されました。

中国における知的財産権保護の環境にはこの1，2年、大きな変化が発生しています。たとえば、弊所が代理した意匠権侵害紛争事件において、意匠権者であるお客様が300万元の賠償金を獲得しました。また、弊所が最近代理している原子力発電に係る特許権侵害紛争事件は、中国初の原子力発電関連の特許権侵害訴訟紛争事件として広く注目され、弊所お客様である原告は賠償金を1億元請求しています。

また、高額の賠償金が言い渡される知的財産権訴訟が増加の一途である状況において、「私たち弁理士に春が来た」と多くの弁理士が歓迎しているようです。しかし、私は、中国における知的財産権の保護意識がますます強化されているこの時代だからこそ、ますます多くのお客様がより高品質の知財サービスを求めるようになると思うのです。ですから、中国の特許代理サービス機構は、コストパフォーマンスはもちろん必要ですが、よい結果を出すということが必要不可欠であることを念頭におき、新たなチャレンジに向かって、周到な準備をすることが必要なのです。

失敗を恐れることなく、進んでいくべきで、立ち止まってはいけないのです。自分が一旦決めた道は、歩み続けることが必要なのです。

私は、林達劉事務所の一員として、事務所の発展、中国知財の発展をこの目で見ながら、自分自身も引き続き成長し続けたいと思っています。

設立記念日に思いを寄せて

北京林達劉知識産権代理事務所
事務所シニアグループリーダー　宋　暁雯

2017年7月、私は事務所設立14周年の記念日まで36日を残すばかりの今日、この文章を書いています。あと20日余り経ったら、私はさらに研鑽を積むために米国に旅立ち、暫く事務所を離れる予定です。そして、10日ほど前に6月から7月初旬にかけての米国出張から帰国したばかりで、何かと身辺が慌しい日々の真っただ中にいます。ですから、私にとって、これまでのことを振り返り、今後を展望するのに今ほど相応しいタイミングもないと思い、私の等身大の思いを皆さんに紹介させていただきたいと、筆をとった次第です。

● これまでを振り返る

私は2014年末より、欧米の案件と市場開拓の業務に携わるようになり、すでに2年半余りが経ちました。それ以前にも、私は少なからぬ米国特許庁の拒絶理由通知書に応答したり、米国の事務所の短期研修に参加したりしたことがありました。しかし、世界屈指の知的財産強国である米国に3週間以上続けて滞在したことはありませんでした。どのように対処したらよいのか判断に窮する時、或いはレポートや問い合わせへの回答をどのように作成すればよいかきちんと説明しなければならない時、私は自分自身の力不足をふがいなく思うことがあります。もちろん、私たちは精一杯最善を尽くすべく努力しているのですが、どうしたらお客様から私たちの作業方式を認めてもらえるのか完璧な回答を出せないことがあることも否めません。

私は今回の米国出張で、ここ数年、手を携えて業務に当たってきた何人かの米国弁護士に会う機会に恵まれました。

弊所はM事務所と、米国の大手科学技術メーカーであるA社の案件をスクラムを組んでやってきました。私自身、M事務所を実際に訪問させていただいたことはありませんでしたが、今回の訪米で当該事務所所属のE弁護士に偶然お会いすることができ、私が彼をフルネームで「Mr.Ye E」とお呼びすると、先生は満面に喜びの色を浮かべてくださいました。続いて、もう一人の小太りの弁護士が出てきて私たちに、「こんにちは、私はTです。」と挨拶してくださいましたので、私が間髪を入れず、「Mr.Dy Tですね。」と尋ねると、「はいそうです。貴女はNancy SONGですね。」と、私たちはお互いに初対面にもかかわらず、それまでの数百通のメールでのやり取りがいろいろ思い出され、まるで古くからの旧友と久しぶりに再会したかのような気持ちになりました。

面談が進むにつれて、私たちはいつものようにM事務所に対して、弊所のやり方に対して、何か意見や問題点はないかと率直に尋ねてみました。Mr.Tは、「私たちは貴所のOA担当の弁理士のコメントに大変満足しています。何と

言っても説明が明確ですし、実行可能な具体的な提案をしてくれます。しかし、A社は今回、中国のその他の数箇所の事務所と提携することを正式に決定してしまったので、正直言って、A社の案件を貴方たちと一緒にやっていけなくなったことをとても残念に思っています。……。」と遠慮することなくはっきりと言ってくれました。M事務所の創設者であるG弁護士は、「お分かりですか。私たちは貴方がたの大ファンなのですよ。」と言ってくれたのです。

また、B事務所とのお付き合いでは、弊所は随分以前に数件の案件を依頼いただいたことがあっただけで、その他の形式での協力関係はまだありませんでしたが、昨年以来B事務所から弊所への案件依頼が突然大幅に増加したのです。そのため、今回の米国出張では、その点をぜひ確認したいと興味を持って、B事務所を訪問したのです。私たちが訪問時にこのことについて言及すると、B事務所のシニアパートナーは、「ええ、確かに私どもは、貴所と直接の面識はありませんでした。最初に貴所を知ったのは、ある米国の案件が他の事務所から私どもに移管されてきた時のことでした。その時、貴所では中国のファミリー出願を代理されており、私どもの当該案件の弁理士は貴所の作業品質を高く評価して、この出願人の全ての中国特許を貴所に依頼するようにとの強い提言があったのです。そんな時、当該出願人は昨年、中国に子会社を設立しましたので、中国への出願件数が急激に増加し、貴所への案件依頼もそれに伴い急増したのです。」と笑いながら教えてくれました。

2017年、弊所が『Intellectual Asset Management（IAM）世界特許事務所TOP1000』の推薦リストに初めて名を連ねた時、IAMの弊所に対する「Effusive foreign associate recommendations propel Linda Liu & Partners into the IAM Patent 1000 for the first time this year」という評価を読み、米国に実際に来て、お客様から私たちの仕事に対する認可を実際に耳にして、胸につまっていた大きな心のつかえがおりたような気がしました。もちろん、お客様の弊所に対する評価にはさらなる期待や要望があることも身に染みて分かりましたが、林達劉で苦楽を共にしてきた欧米グループの所員は感激で胸がいっぱいになったのです。

さらに、今回の米国出張では、D事務所のパートナーから、「貴女が平易な言葉で、ご自分の事務所を紹介するとしたら、その他の事務所との違いを、どのように説明されますか。」と尋ねられました。私は「2つの観点から説明させていただきたいのですが、よろしいでしょうか。まず、弊所のLindaと魏弁護士は、多くの日本のお客様との付き合いの中から、品質を最重視するという方針を事務所のモットーとして、それが事務所全体に根付いていることです。次に、弊所は、ビックファミリーとしてまとまり、所員一人一人が、落ち着いて気持ちよく仕事できる環境が整っていることです。ですから、私も今回、安心して米国出張に来ていますし、酷暑をものともせず、身体の限界や様々なプレッシャーに挑み、本来私の担当すべき案件に取り組みながら、出張組の足を引っ張らないように頑張り、私たちのことを却って労わってくれる信頼すべき多くの仲間がいることを、多くの皆さんに知って、理解してもらいたいと願っています。私たち大ファミリーのお互いに揺るぎない信頼関係は、同僚たちの思いやりによるものであると、皆が感謝しているのです。」と答えました。D事務所の数名の弁護士は、思わず黙り込み、しかし私の意見に共鳴してくださっている

ことをひしひしと感じることができました。

わずか2年余りという短い期間で、私たちがお客様から認めていただけたのは、お互いを思いやる心と、最高の品質を一途に追求する態度によるものであると自負しています。弊所の弁理士は毎日勤務時間後も、お互いにWeChatでお客様からの最新の要望などを連絡しあっています。また、競争がますます熾烈になっている中国知財サービス市場において、手を緩めることなく、お互いに励ましあい、我が子に対するような細心の配慮と誠実な態度で、お客様の本音を聞き取れるように、お互いに注意喚起しあっているのです。これこそが、私たちが大ファミリーたる所以なのです。

● **未来への展望**

案件数の増加に伴い、私の仕事における職責は、弁理士として日々処理すべき案件だけにとどまらなくなっています。事務所が設立14周年を迎えるに当たり、私たちのような若い世代に対する要求も、徐々に多様化してきています。直面する新たな課題も後を絶つことなく、私たちはその都度、周りの友人や同僚、専門書から新たな栄養を吸収し、新たな思考回路で、反省しながらチャレンジしているのです。

● **理知と感情、人の識別と伝えていくこと**

私はとても感情的なところがあり、心の琴線に触れるような言葉に、感動して涙することが多々あります。しかし、時として、感情は理性を妨げてしまうもので、相手の辛さをおもんぱかることをせず、大局の配慮に欠けてしまい、すべきことができずに終わってしまうこともあります。また、私は、自分の感情に素直に、相手に歩調を合わせようとするために、同一の職責で仕事をする人の育成が疎かになってしまうことがあります。そして、メンツを気にしすぎるために、相手がくみ取るべき教訓や知っておくべき情報を伝えないことがあったことも否めません。さらに、人材の育成に重きを置かず、自分一人で仕事を抱え込むことが効率的だと思い込み、自分の体にむち打ち、残業した結果、わずか20日間で体重が5キロも落ちたこともありました。

私は、ビジネス界の名著『ロックフェラー伝』のあるくだり、すなわち、ロックフェラーは部下に対して非常に厳しい態度で教育するのですが、ある部下に必要な素質と能力があると認め、その任に堪えうると合格点を一旦与えたら、「その部下が深刻なミスを犯さない限り、彼らの仕事を干渉しないという最大級の自主権を与えた。」というくだりと、ある時、ロックフェラーがある新人に対して、「ここでは仕事のきまりはないと言ったことがあると思うが、その意味は、誰かできる人にやらせれば、自分はやる必要はない、……あなたはできるだけ早く自分の信頼できる人を探し、自分の仕事を任せ、自分はそれを見ていればよい。すなわち、頭を使えば、会社に多くの富をもたらすことができるのだ。」と言ったくだりを読み、はっと気づいたのです。

金儲けは、世俗と離れることができませんが、じっくり考えてみれば、一人の力でやり遂げることが、プロジェクトのつめかける一方である今日、そう大して問題にする必要はないのです。事務所の規模が大きく発展した今、私たちはすべきことについて、黙って引き受けるだけではなくて、マクロ的な方針で、私たちのグループの影響力に対して、より決定的であるべきなのです。この前提とは、人を識別し、育成し、グループの団結力を育てることなのです。

● **検討と衝突**

多くの人が同じような意見をお持ちだと思いますが、私たちは、自分とは異なる意見を耳にすると、最初の反応として、眉をひそめ、アドレナリンが高くなり、身体全体で本能的に抵抗しようとするものです。しかし、5秒間程度心を穏やかにして、相手の意見をじっくり考えれば、相手が出してくれた全く新しい観点と考え方は、自分にとっても相矛盾するものではなく、双方の意見を互いに融合させれば、より素晴らしい補う役割を果たすことができることに気づくはずです。出張の全体的な段取りから案件分担の具体的な担当などまで、いろいろなことを網羅することも分かるはずなのです。

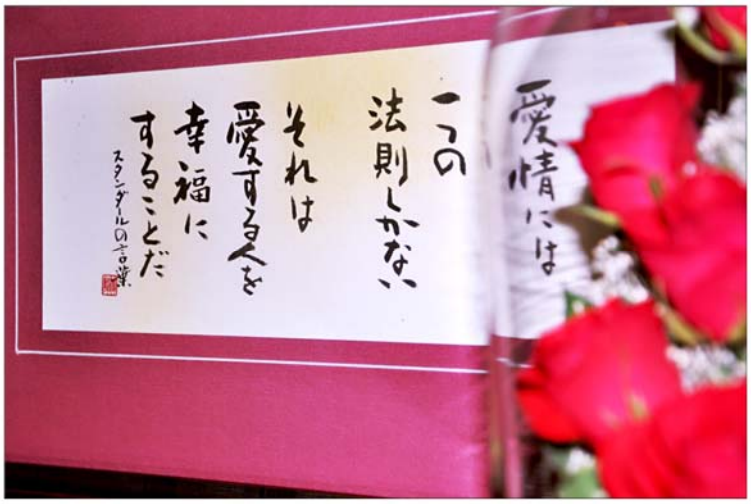
Lindaの30数年前からの友人である英国のスーパー弁理士であるMr.David Muskerがは、「私たちは時として、あの人は今多忙を極めているので、彼を煩わせてはいけないと考えることがあるかと思います。しかし、実際には、他人の問題を考えたり、お互いの考え方を交流したりすることは、同僚との関係を維持するとてもよい方法なのです。

たとえ、自分ですでに解答が分かっていたとしても、他の同僚の意見を聞くことで、より良い効果をもたらすことができ、相手の自尊心をも満足させることができるのです。だから、必要に応じてそのようなやり方も積極的に採用すべきなのです。……私のやり方は、これまでに何度も挑まれてきましたが、私は毎回自分の誤りに気づき、他人のやり方の中から必要なことを吸収し、それをさらに昇華できた時、とても爽快な気分になれたものです。つまり、自分自身が絶えず前進していることを知ることが、とても重要なことなのです。絶えず学習し、絶えず進歩することは、私たちが生涯を通してすべきことなのです。」と以前に言われたことがありますが、これは、私にとって今後より注意すべき大きな課題であると真剣に考えています。

● 能力と小さな知恵

ある人から、「あなたは正に能力のある人で、情熱やファイト満々であるだけでなく、周りの人に対する影響力もある」と言われたら嬉しいものですね。しかし、面白いことに、心の奥底には二面性があるものなのです。私は、他人のために小さなことにこだわり、気分が不快になることはありますし、他人による些細な心配事のために、感情のコントロールができなくなってしまい、病気になってしまうこともあります。そのため、出張、留学準備、日常の案件の処理などがいろいろ重なり忙しい時、時間を見つけては病院通いすることになるのです。しかしながら、不運なことが続く時は、より一層冷静に考え、困難を克服できるようにしなければなりません。人生とは山あり谷ありで、平たんなことばかりではないのです。深い穴から全力ではい出ることも、人生にとって必要不可欠な構成部分なのです。『呂氏春秋』でも、「登山者，処已高矣，左右望，尚巍巍焉山在其上（山を登る時、高くまで登っても、周りをよく見て、もっと高いところがあることを知りなさい）」と述べていますが、もし新たな解釈が許されるなら、「新たな山頂を絶えず目指し、問題解決の過程において新たな技能、インスピレーションや達成感を獲得することも、楽しみである。」と前向きに捉えたいものです。

● **造詣と将来の青写真**



将来的には、中国企業の国際市場における地位はますます重要になり、それに伴い企業も知的財産権をますます重視するようになるものと思われます。中国IP業界におけるトップレベルの人材の教育背景、知識及び実務レベルは、国際レベルに達しようとしています。「長江後浪推前浪（長江の後ろの波が前の波を押し出す）」と言うように、私たちはLindaから、「適時に知識や経験を蓄えておかなければ、必要に迫られた時、その不十分なところが障害になり、その人は凡庸なまま終わってしまう。」と教えてくれました。

私は、今後1年間米国カリフォルニア州シリコンバレーで、私自身の人生の、事務所の新たなプラットフォームになり得る財産を構築したいと思っています。限られた人生において、私は職場、家庭での役割をそれぞれ全うし、時間を有効に使い、自分の才能と事務所、社会との間の最適な関係を作りだし、いつまでの夢を抱きながら人生を歩んでいきたいと思うのです。

輪廻

北京林達劉知識産権代理事務所

パートナー　耿 秋

「輪廻」とは仏教用語で、「生死輪廻」とも言い、衆生が生まれては死に、死んでは生まれる苦しみのことを意味し、車輪が回転を自然には止めることができないような迷いの世界のことを言うのです。私は今から2年前、事務所設立１２周年の記念日に、Lindaがスピーチで「輪廻」について言及するのを聞きましたが、その時は、その奥深い意味まで考えることはできませんでした。しかし、今年に入り、私自身入所して干支を一回りし、徐々にその意味を理解できるようになり、その漢字二文字に隠された深い意味を悟ることができるようになったような気がしています。

2005年4月5日に正式に事務所に入った私は、それから12年の歳月が流れた2017年4月5日、北京本部から上海オフィスへの異動を命じられ、上海オフィスの所長として多忙な日々を送っています。私は、この偶然のめぐり合わせに気づいていませんでしたが、やはり天の配剤だったのでしょうか。今年4月の清明節に故郷である貴州に帰り、急逝した父の葬儀を執り行った後、中国で最もモダンな都市である上海に居を移し、新たな仕事と生活を始めたのです。私にとっては、新たな命の始まりとも言える大きな変化で、新たな12年間の輪廻の始まりでもありました。

「帝都」とも称される北京は、私にとって、幼い頃からずっと憧れの都市でした。私が13歳の時、私の幼馴染が高い舞台に立ち、「阿媽告訴我、阿媽告訴我、沿着湾湾的小河就能走出草原、遥遠的地方、有一個北京、我知道那是中国的首都……（祖母が私に教えてくれた。そう教えてくれた。川に沿って草原を抜け出した遥か彼方には、中国の都である北京があることを知っている……）」と歌った時、私は訳もなく、熱い涙が止め処もなく溢れ、将来は絶対

北京に行って、一生懸命努力して夢をかなえようとひそかに決心したものでした。そして、私は北京の大学に合格して、今回北京を離れるまでの16年間、そこは夢を一歩一歩かなえてきた舞台でした。私は、天安門広場の活気に満ちた雰囲気が、野長城を登りつめた時の豪放さが、頤和園の四季折々の景色が、名もない湖畔の真珠のネックレスのように続く街灯が、北京の至る所にあるそれぞれ趣を異にする書店などが大好きでした。そして、何よりも私の心に深く刻み込まれているのは、この12年間の「輪廻」で巡り会えた林達劉での記憶で、清華大学の近くにあった学研大厦から北三環の北京環球貿易中心に移転した北京本部で、その仲間たちと一生懸命仕事をし、人間的にも成長しようと一歩一歩歩んできた思い出がいっぱいあります。私たちは、ある案件の全ての証拠を整理し、分析するために徹夜したことがありました。また、新年を迎えるに当たり、お客様に挨拶文をお送りするために、十数名の同僚が同じ会議室に集まり、手紙の作成、プリントアウト、封筒詰め、最後に所長の署名を入れ、一日で数千通の新年の挨拶状を作成したことがありました。そして、魏弁護士の指導の下、本物とニセ物の商標が実際の使用において如何に類似しているのか、どのように誤認や混同が発生するのかを裁判官に分かってもらうために、ある都市から別の都市まで、高速鉄道、電車、タクシーを乗り継ぎ、大きな身の丈ほどもあるタイヤを抱えて移動したことがありました。さらに、私たち若い所員が国際会議に参加させてもらい、お客様とアポイントを取り面談したり、レストランを探しランチミーティングを開催したり、さまざまなレセプションに参加したり全てのスケジュールを自分たちで手配して、旧友との再会や新たな友人との出会いに胸ときめいたこともありました……1年また1年、毎年いろいろな仕事や多くの出来事があり、時があっという間に過ぎ去り、私たちには、多くの思い出、いろいろな経験、そしてさまざま見聞を積み重ね、最初痩せ細った小さな木のようだった私たちは、高く、大きく成長することができ、年輪を刻んできたのです。

それから12年が経ち、私は、「魔都」とも呼ばれる上海にやってきました。上海は、経済が非常に発展した中国の中心都市で、優秀な人材が集まり、生活に必要なものはすべて揃っている非常におしゃれな都市です。高層ビルの上から、外灘の全景を見下ろせば、陽光の下、きらきら輝く美しさに魅せられ、夜になれば様々な色のまばゆいばかりのネオンにひきつけられる夜景が広がっているのです。また、黄浦江沿いにたたずみ、一艘、一艘とひとつながりになって川を進む汽船を眺めれば、上海の静けさと繁栄とを交互に垣間見ることができ、川沿いにあるレジャー公園で、一塊になった子供たちがスケートボードで遊び回り、自転車を走らせながらロッククライミングをする雄姿を見れば、彼らの青春の息吹を目の当たりにすることができます。この都市は、私に新たな角度、新たな視点、そして新たな考え方で、将来の発展方向を教えてくれるのです。ですから、私もまた、新たな出発点に立つことができたのだと、上海に心より感謝しています。

2012年に設立した上海オフィスは、前駐在代表呉秀霜弁護士と上海の仲間のたゆまぬ努力によって、この5年間の発展期間を経て、上海及びその周辺地域の多くのお客様の絶大な信頼を獲得することができました。私は呉弁護士との引継ぎ期間に、一緒に上海及びその周辺のお客様を一社、一社訪問しました。そのうち、あるお客様は、私が

北京本部時代に案件を依頼してくださっており、私は、そのお客様の案件を直接担当していたのですが、直接お会いする機会はありませんでした。今回上海でそのお客様と初めて面会した時、そのお客様より提供していただいた一抱えの資料に基づき、今年と来年の新たな出願計画についての詳細を相談させていただき、数十件の新規案件をご依頼いただき、言葉で表すことのできない感謝の気持ちで一杯になりました。それだけでなく、そのお客様は、私たちがいとまを告げた時、同じオフィスビルに入居している他のお客様をご紹介くださったのです。私は感謝と感激で胸が一杯になりました。また、こんなこともありました。私にはこれまで懇意にさせていただいている少なからぬお客様がおり、これまで上海や北京、そして日本で交友を温めていました。今回、上海の古くからの友人と面会し長い時間にわたり、和気あいあいとした雰囲気の中、上海の発展の将来性、上海人の考え方の特徴、知財業界の発展動向や上海オフィスに対する率直な意見などいろいろ率直に教えてくださいました。それだけでなく、彼らはとても親切に、上海ならではのレストランやとてもおしゃれな異国情緒あふれるスペインレストランなどを教えてくれ、外灘のクルーズにも私を連れ出してくださり、上海の歴史や上海のメモリーなどもいろいろ教えてくださいました。そして、北京や日本の友人が上海に私に会いに来てくださり、上海の生活に慣れたかとか、何か困ったことはないかとか、何か手伝えることはないかとかなどいろいろ親身になってくれ、彼ら自身の体験をいろいろご親切に教えてくれたのです。さらに、浙江地域のお客様を訪問した際には、その企業の急速な発展にとても脅かされました。ある企業の先進技術は、すでに世界のトップレベルと肩を並べ、ある企業の発展は緩やかであるものの、その研究開発能力、製造力、及び知的財産権をますます重要視するようになっており、知的財産権方面に関するニーズはますます多様化していました。特にお客様との意見交換で、お客様のニーズをくみ取る能力に優れ、最大限の努力でお客様のニーズを満足しようとしていることには、心より敬服しました。そして、私の頼もしい上海オフィスの仲間たちは、お客様が現時点でまだ認識すらしていない問題点に対しても、自分たちの知識と経験に基づいて、お客様に対してアドバイスや協力を惜しまず、依頼された案件をうまく処理できるようにたゆまぬ努力をしています。さらに、私たち上海オフィスでは、上海やその周辺地域において、セミナーやサロンを積極的に組織して、お客様に対して最新の知財ニュースや経験などをご教示できるようにすると同時に、お客様に上海オフィスにご足労いただき、その技術や製品の紹介をしていただき、お互いに理解を深めながら、情報を共有して、学習しているのです。

しかし、何と言っても私は多くの時、やはり2005年の私の旅立ちの時に立ち戻るのです。そして、最初の「輪廻」において、私を教え導き、助けてくれ、時には厳しく注意してくれた先生、同僚やお客様に心より感謝しています。それによって、私の心は落ち着きを取り戻し、新たなチャンスとチャレンジに勇敢に立ち向かうことができるのです。今、私は二回目の「輪廻」において、一人ではなく、上海オフィスの頼もしい仲間と手を携えながら、共に歩んでいます。そのほか、私たちは蘇州分所の仲間ともお互いに協力体制を構築し、お互いに助け合っています。さらに、北京には力強い300名近い仲間が、支援、協力してくれています。林達劉事務所のこの14年

の発展は、信義則、信用の遵守、品質保証、効率重視、団結力、低コスト、練磨という事務所の所訓が裏付けているのです。事務所がこの理念を今後も持ち続け、引き続き発展できるように、これからも精一杯努力する所存です。

事務所設立14周年を迎えられたことに、改めて感謝申し上げます。

（今回のIPNEWSに掲載している写真は、弊所のリンダが撮影したものです。）

責任者： 代表取締役 弁護士 弁理士 魏 啓学 （Chixue WEI）
社長 弁理士 劉 新宇（Linda LIU）
担当者： 所員 キン 英芳（Yingfang JIN） 張 輝 （Ashley ZHANG）

林達劉グループ 企画室 （Business Development Department, LINDA LIU GROUP）
〒100013 中国北京市東城区北三環東路36号 北京環球貿易中心C座16階
Tel： 86-10-5825-6596 (WEI) 86-10-5825-6089（LIU） 86-10-5825-6366（代表）
Fax： 86-10-5957-5201(代表)
E-mail: ipnews@lindaliugroup.com
Website: http://www.lindaliugroup.com